DEBUT 首長

神奈川県伊勢原市長　高山　松太郎氏

財政対策は歳出減で起債抑制 新東名ICや大山観光に期待

たかやま・まつたろう　1950年神奈川県伊勢原市生まれ。68年県立平塚農業高卒業。91年から４期連続で伊勢原市議会議員を務め、03年には市議会議長。07年神奈川県議会議員に初当選し、12年に市長選出馬のため辞任した。62歳。

伊勢原市　神奈川県のほぼ中央で東京から50kmに位置する。人口は約10万人で、丹沢大山国定公園の大山が市のシンボル。

――2012年９月の市長選で主に市民に訴えたのは何か。

伊勢原市だけの問題ではないが、超高齢化社会になり、扶助費の増大は避けられない状況だ。財政難だということを市民に訴えた。一部報道で市の財政が厳しいことが取り上げられ、市民からも「どうなっているんだろう」という不安の声が上がっていた。

――財政状況はどれくらい厳しいのか。

（11年度決算でみれば）一般会計の歳入が291億円のなかで、市税収入は155億円程度に過ぎない。毎年、市債という借金でまかなっている状況だ。過去に計画的に返すべきだった借金が膨らみ、現状につながっている。さらに事業公社などの債務縮減のため、財政負担が重くのしかかっている。

伊勢原市は市街化区域の比率が20.6%と、県内平均の半分ほどだ。大型の道路開通などがあまりなかったためだが、税収も落ち込んでいる。

――落ち込む税収を増やすため、産業政策として取り組むことは。

１つはインフラの整備を生かすことだ。18年に新東名高速道路のインターチェンジ（IC）が開通、それに向けて国道246号バイパスが16年に出来上がる。周辺の土地活用を急ぎたい。具体的にはこれからだが、IC周辺や県道22号（横浜伊勢原線）沿いの農地の土地利用計画を変更し、工業や物流系の団地にできないかを検討している。

観光振興にも力を入れる。県の観光政策にも位置付けられた大山・日向地区ににぎわいを取り戻すことを起爆剤にしたいと考えている。大山の年間の観光客数は約90万人で、若干戻しつつあるが旧道の幅員が狭い。ここ３、４年で新たにバイパスを整備し、観光バスが入ってきやすくする計画だ。由緒ある寺院の日向薬師は350年ぶりの大改修を実施中だ。温暖な気候で農作物は何でもできるが生産から加工、販売の６次産業化で「伊勢原ブランド」を作り上げ、観光とセットで売り出したい。

――財政健全化に向けて、歳出削減策はどうか。

歳出を減らさなければ起債額が大きくなる。13年度の予算編成では人件費も抑制し、職員数も計画的に減らしていく方向だ。職員には前例踏襲をしないように伝えている。

一方、市内の医療基盤は大変充実しており、東海大病院や14年に移転新築が完成する伊勢原協同病院がある。国の地域活性化総合特区に申請している「さがみロボット産業特区」の構成にも入っていて、医療関係ロボットの実証試験やベンチャーの育成などにもつながればと考えている。医療費を抑制するため、予防医療の実現にも力を入れたい。若い子育て世帯にも住んでもらえるような独自色を出した街づくりをしたい。

（聞き手は
横浜支局　**井上　孝之**）

禁複製・無断転載